

戦争の是非

戦争は否定できないという立場

二班 鄭・猫塚・鈴木

二つの立論

①平和を保つ十分な手段は
確立されていない

②生物としての欲動の行為

①平和を保つ十分な手段は確立されていない

戦争勃発の原因

(1)情報の非対称性

(2)コミットメント問題

(3)価値不可分性

① 平和を保つ十分な手段は確立されていない

平和を保つ手段

(1) 軍拡・安全保障

(2) 貿易・経済の流動化

(3) 民主主義国家の形成

②生物としての欲動の行為

- (1)戦争解決の手段
- (2)心と戦争
- (3)暴力と権力
- (4)革命
- (5)愛と破壊

アインシュタイン, フロイトの手紙から戦争を捉える

国際社会はアナーキーであるため、
自国及び他国を侵略しない保証を
してくれる存在はどこにもない。

(1)戦争解決の 手段

戦争問題解決の唯一の手段

- 全ての国家が一致団結して一つの機関をつくり、この期間に立法と司法の権限を与える。
- 国際的な紛争が起きた際にはこの機関に解決を委ね、国はこの判断に必ず従わせる。

この手段の問題

- 正義を実現させるためには、この機関に大きな権力がなければ意味がないが、今の国際連合には実質的な力がないので戦争を止めることができない。
- 平和の実現には各国が主権の一部を完全に放棄しなければならない。

(2)心と戦争

少数の権力者が国民の心を掌握できるわけ

- 人間には本能的に憎悪に駆られ、相手を絶滅させようという欲求が潜んでいるからではないか。
- また、この欲求を呼び覚ますことはそれほど難しくはないのではないか。

人間の憎悪と破壊という心の病

- 人間の中に存在する攻撃性というのは、いじめや虐待、家庭内暴力、煽り運転、パワハラなどさまざまな形で表に出てきている。
- 事実人が何故戦争をしてしまうのかという理由がわかっているにも関わらず、結局また戦争を起こしてしまうのが人間の複雑さそのものである。

(3)暴力と権力

暴力と権力は密接に関係している。

- 団結した人間の力を法と呼び、法をもって一人の人間の暴力に対抗することもまた暴力であることに変わりはない。
- 歯向かう人間がいれば、やはり暴力に訴えるのである。
- 違いは一人の人間の暴力か、多数の人間の暴力かである。

共同体を持続的なものにしていくためには

- 法に則った暴力を行使できる機関を定めなければならない。
- 人間の集団を繋ぎとめるのは感情の絆、一体感である。

(3)暴力と権力

立場の違い

- 社会は、同じ強さの人間ばかりで成り立っていない。
- 男、女、大人、子供といったばらばらな力を持った人が暮らしている。
- 戦争が起これば勝者と敗者が生まれ、主人と奴隷という関係に変わっていく。

支配者による創造

- 法というものは、現実の不平等な力関係をうつしだすものになっていく。
- すなわち法律は支配者によってつくられ、支配者に都合の良いものにつくり変えられるのである。

法律は平等だと思いたいが、実際はそうではなくどんどん支配者側に有利につくられる。そしてそれを覆すためには、

革命の暴力 が必要になるのである。

(4)革命

「法による支配」から「暴力による支配」へ

- 法によって支配される社会が一度出来上がっても、利害の対立が起きれば暴力が問題を解決するようになる。
- 人類の歴史を遡れば、その対立のほとんどが戦争という力比べによって決着をつけてきた。

「不平等な法」から「万人に平等な法」へ

- どのような集団であっても、戦争に参加すれば強奪か服従に行き着く。

逆説的に聞こえるが、人々が「焦がれてやまない」永遠の平和を達成するのに、戦争は決して不適切な手段ではないのである。

征服によって勝ち得た

状態は長続きしない。

(5)愛と破壊

人間は本能的に問題があるのではないか

- 人間は本能的に憎悪に駆られ、相手を絶滅させる欲求が潜んでいるのではないか。
- 人間には二つの欲求がある。ひとつは愛、もう一つは破壊。

愛と破壊の善悪

- 一方が善、もう一方が悪であるとは決めつけられない。
- どちらも人間に必要不可欠である。
- 人間の行動は複雑なもので、愛や破壊衝動が結びついて出来上がった欲動がいくつも合わさっている。

生命体は異質なものを外へ排除することで自分を守っている。即ち、私たちが反対してやまない行為を、生物である以上仕方ないという言い訳を与えることになる。

参考文献

[アインシュタインとフロイトの手紙 - 検索 \(bing.com\)](#)

[An Introduction to Ethics of War.pdf \(u-tokyo.ac.jp\)](#)

「ヒトはなぜ戦争をするのか？ アインシュタインとフロイトの往復書簡」 花風社出版, 2000.